



The Melbourne Cup Natalie Edmondson

In my last article, I talked about how important sports are in Australia. In this one, I would again like to talk about an important sporting event that happens each year in my country. But rather than being a traditional team sport, this time I would like to talk about a horse race. In Australia, the first Tuesday in November is the Melbourne Cup, aka 'the race that stops a nation'.

It is called this because, even though it is not a public holiday, people act as if it is. Shops close early to watch the race, radios on busses are tuned into the station, and everyone has a sweepstakes for the race. My father does not like gambling, but every year would enter into the office pool for each of his daughters. Even in the after school programme, we would draw names out of a hat and watch the race in the classroom. Normal rules don't apply.

Horses who win the world cup are revered. Phar Lap (the winner in 1930) was the most famous horse of his day and his heart can be found in a museum in Canberra, his skin in one in Melbourne, and his skeleton on display in one in Wellington (New Zealand). But more than the race itself, the Cup is a chance to have fun. People who didn't usually gamble are allowed for this one day of the year. People dress up in fancy dresses and drink champagne in the afternoon. You can wear ridiculous hats. I encourage you to look at some pictures and admire the artistry of what some people put on their heads. It's a fancy-dress garden party, and the whole country is invited- that's worth an afternoon off work.

メルボルン・カップ ナタリー・エドモンソン

前回(※)は、オーストラリアではいかにスポーツが大切かというお話をしました。今回は、毎年恒例の重要スポーツイベントについてお話したいと思います。といっても今回は伝統的なチームスポーツではない競馬のお話。オーストラリアでは毎年11月の第1火曜日はメルボルン・カップ、別名「国の動きを停めるレース」の日。

というのも正式な祝日でもないのに、みんなあたたかも休みのように振る舞うから。レース見たさに店じまいも早く、バスのラジオはレースの中継、みんな馬に賭ける。賭け事を好まない父も、毎年それぞれ娘のために会社で馬券を買ってくれたものです。学校の放課後活動でさえ、帽子に入れた馬の名前のクジを引いて教室でレースを見たものです。普通の規則なんて今回ばかりは、無

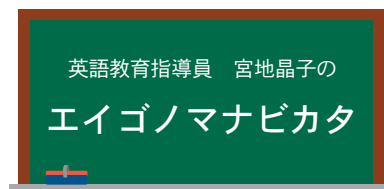
しです。

ワールドカップに出場する馬は尊敬されます。1930年の優勝馬ファールラップは、当時、最も有名な馬で、今でもその心臓がキャンベラの博物館に、剥製はメルボルンの、そして骨格はニュージーランド・ウェリントンの博物館に展示されています。

とはいえレースそのもの以上に、メルボルン・カップは楽しむチャンスするとき。普段はギャンブルしない人もこの日だけはオッカー。高級ドレスに身を包み、明るいうちからシャンパンを楽しむ。馬鹿みたいな帽子だっけかぶれる。ぜひ写真でも、頭を飾るその芸術を愛でることをおすすめします。高級ドレスに身を包んだガーデンパーティで、国中の人が招待客。これはもう午後休を取って行く価値大ありです。

(訳:宮地晶子)

※ 6月号のオーストラリアのスポーツとラグビーの試合「ステイト・オブ・オリジン」のこと



第165回

夢をあきらめない

以前、東川中学校で「差別や偏見のない社会の実現」という話をしてくれた音楽グループFUNKISTの染谷西郷氏。今回は「夢の実現」について。日本人の父親と南アフリカ共和国の英国系アフリカ人との間に生まれた彼。「ガイジン」といじめを受け、自分が何人かわからず居場所がないと感じていた高校生活。1回戦も勝てない弱小サッカー部の、しかも補欠の彼に向かって、教師が熱い進路指導。「プロのサッカー選手になりたいと思わないのか」「やっ

てみないとわからないだろ。とことんやってみろ」。「???」と思ったけど、全力でやったら、レギュラーになれば、チームも優勝!やりきったからこそ、音楽という新しい夢ができたとき、納得してサッカーを横に置くことができた。面白かったのが、その進路指導の安田守先生。ずっとイモムシの写真を撮っていた彼は、50才にして「プロカメラマンになる」と退職。本当にイモムシの写真集を出版。だから進路指導も本心からしてたんだな、その先生。思えば、私が中学校で教えたい、と思ったのは教員採用試験が受けられない年齢になってから。そのとき、まるで夢のように林・前教育長が「中学校で英語を教えませんか」と声をかけてくれました。当時の学校はなかなか厳しい雰囲気。くじけそうでした。でも、そのうち教えさせてもらえるようになったとき「先生、良かったね!」と声をかけてくれる生徒たちがいました。以来ずっと、毎日英語が教えられて幸せ。染谷さんは音楽で幸せ、安田守さんはイモムシを撮って幸せ。好きを仕事にできたら、やっぱり幸せですねえ。